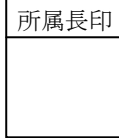


(特研様式5)



早稲田大学総長 殿

2010年 9月 13日

所 属 本庄高等学院
資 格 教諭
氏 名 曾原 祥隆 印

特 別 研 究 期 間 研 究 成 果 報 告 書

1. 研 究 課 題：花田清輝『復興期の精神』の研究
2. 研 究 期 間：2007年 4月 1日 ～ 2008年 3月 31日
3. 研 究 場 所 (国/都市・機関名)：早稲田大学

4. 研究成果概要 (2,000字以内)：

戦後の花田清輝に対しては、毀誉褒貶相半ばするところがあり、とりわけいささかドグマチックにマルクス主義を奉じつづけた態度をめぐっては評価の分かれるところであろう。ところが、戦時下に執筆された一連のエッセイを収めた『復興期の精神』の評価に関していえば、事情は大いに異なってくる。この著作に対しては、従来少なからぬ賛辞が寄せられており、久しく端倪すべからざる一書と目されてきたといえるのである。

とはいえ、本書が十分に検討に付されてきたのかといえば、必ずしもそうとはいえない。たとえば、花田のよき理解者として知られる佐々木基一は『同時代作家の風貌』において、「花田清輝の抵抗は単に戦争にたいする一面的な抵抗にとどまらなかった」と注意を促したうえで、「戦争という非人間的な現実にたいするあまりにも人間的な抵抗、あまりにも生真面目な、融通のきかぬ、曲のない抵抗、そしてそれらの抵抗者のあげる哀れな悲鳴や、感傷的なペシミズムや、諦念や、力のない公式論にたいする抵抗がまた彼のエッセイの第二モチーフをなしている」と明快に論定している。たしかに、これはすこぶる当を得た解釈であり、『復興期の精神』の一側面をみごとに照射している。

佐々木が『復興期の精神』を論ずるにあたって前提とするのは、「彼の文章を素直に、文章に即して、すなわち即物的に読むならば、そこにいささかの曖昧さも感じられるはずはなく、歯切れのいい、厳密に論理的な文体が見出される」という観点である。坪井秀人もまた、「じっくり時間をかけて読んでみれば、これほど明晰でコスミックなまでに体系だった文章の作品は稀である」（『戦後思想の名著 50』）と述べ、佐々木とほぼ同様の見解を披瀝している。だが、はたして『復興期の精神』は、ことほどさように理路整然たる論述で満たされた書物といえるのだろうか。

というのも、『復興期の精神』の行論をつぶさにたどってみると、「論理的明晰さ」というには程遠い、むしろ平仄の合わない記述が少なからず認められるからである。一例を挙げれば、「群論」において花田は、人間を「実体概念」としてではなく「函数概念」として捉えるべき要を説き、「もはや「私」という「人間」はいないのである」と揚言する。だが、後の「汝の欲すると

